

Title	人口集中の現象に対する経済的説明
Sub Title	
Author	奥井, 復太郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1922
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.16, No.7 (1922. 7) ,p.965(77)- 985(97)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19220701-0077

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

三田評論

第三百號 七月號

清涼美味の

西洋御菓子

相變らず御引立の程を

願ひます

木村屋

芝三田電車通り

塾長の任を辭す

鎌田 榮吉

佛蘭西國立劇場

廣瀬 哲士

勞働保險概論

園 乾 治

人格減等と權利能力の觀念

小池 隆一

西洋紀聞

木坂三五六

新刊紹介

大正十年年度慶應義塾學事及會計報告

雜 錄

人口集中の現象に對する 經濟的説明

奥井復太郎

人口現象に就いては人口總數の増加の有無、
遲速が重大なる問題であると共に一經濟社會内
に於ける人口の分布も亦看逃す事の出来ない問
題を提供してゐる。前者は主として彼のマルサ
スに依つて吾々に與へられた人口原則なるもの
に於いて其の意義を明示されたが後者は近代の
都會對農村の關係、都會内に於ける人口の集中
より結果せる所謂都市問題、更に後に述べられ

る様に、十八世紀末より十九世紀にかけて新し
く勃興し又は新しき意義を持つ様になつた製造
工業都市に附隨した勞働問題其他諸種の社會、
經濟問題によつて著しく世人の注意を惹く様になつた
近來頻に都市計畫、都市經濟問題等が考
究せらるると共に他方には人口の都市集中の過
度の傾向に對する緩和策として田園都市の計畫
が殺風景な大都市によつて失はれた自然の恩恵
を再び日常生活の中に取戻す計畫として企てら
れてゐる。斯くの如き人口集中の現象に對して
其の原因を研究する事は都市發達の將來の傾向
を知る上に於いて非常に重要な事と思はれる。
例へば人口の都市集中と云ふ現象には如何なる
力が作用してゐるか。今日各方面に都市生活の
不満を聞くが少くとも其の原因の一つが都市人
口の極度の膨脹と云ふ事に在るとすれば將來の
都市生活を改造するにはかゝる企圖が都市形成

の根本的勢力と如何なる關係に立つかを明白にしなければならぬ。この意味に於いて以下に試みる人口集中の現象に對する經濟的説明は決して徒爾でないと思ふ。而して現在の都市形成の根本に横つてゐる諸勢力を明かにし得た時、大都市の生活に可なり不満を感じてゐる人々の目に美しく見える理想的の生活周圍、例へばモリスの無何有郷消息の中に現はれて來る様な氣持のいゝ世界の、或は少くとも其れに近似した美しい小都市生活の可能性の存否は決定的に明示せられるであらう。又かゝる研究はモリスの夢みた美しい世界が社會革命の後に生れ出た様に、社會生活の體様を規定してゐる根本的諸勢力の變革を俟たなければ彼等の懐く空想的(と考へられてゐる)理想の現出が不可能である事を明示するかも知れない。又モリスは社會革命の到來を信じてゐたとしてもかの美しい無何有

郷といふ世界は彼にとつても夢の中に丈け現はれて來る可能性を持つたものであるかも知れない。従つて理想がどうあらうと現前の事實の研究は曲げる事が出來ない。現代の大都市の醜惡都市生活の利己的傾向を否定する者も煙突の數と煤煙の黒さと幾十層階の建物の並列とを以つて其の富強を誇る者も一應は現實に作用してゐるかゝる現象の内部に働く諸勢力の性質を眺めなければならぬ。而して前者が猛烈と此の根本的勢力の變革を叫ぼうと後者が其の維持に力め様と其れは其の後の事である。こゝで今執る態度は人口集中と云ふ現象の根本に横はる原因の説明であつて現代都市生活の是認でもなければ又否認でもない。又以下の所論は The Faculty of Political Science of Columbia University で編輯した Studies in History, Economics and Public Law の第十一冊である Adana Ferrin Weber

氏の著 The Growth of Cities, in the nineteenth century: A Study in Statistics の第三章「人口集中の諸原因」の抄譯とも見る可きものである。自分の考が全く加へられないでもないが全體として其れは殆ど重要なものではない。従つて以下の所論の負ふ所を明かにして置く。

二

人口集中の現象は周到なる注意によつて一般的人口増加の結果である都市人口の増加から區別されなければならぬ。從來人口の増加を妨げた原因としては戦争饑饉流行病及び特に高度の小兒死亡率を持つた不衛生極まる都市生活等を算へる事が出來るが醫學衛生學の發達、運輸交通組織の完備、生産力の増加等は如上の災害を除去して近代に於ける人口増加の驚く可き趨勢を示した。都市の人口もこの一般的人口増加の傾向に與かつたのは當然で殊に近代の科學が

生活状態を健康に適せしめる爲めに最も必要と感ぜられたのは明かに群集し過ぎた土地に於いてゐつた。中世紀並びに近代の初期を通じて歐羅巴の都市の人口が増加すると云ふのは、年々の死亡數が出生數とほぼ同じか又は前者が後者を凌駕した様な事情にあつては勢ひ農村から流入する人口に基くの外はなかつた。従つて近代文明の恩恵が死亡率を極めて小數に低落せしめた結果人口の比較的稠密な都會に於いて地方農村なぞよりも人口増加の傾向が遙かに激しい様に見えるのは當然である。

然し一般人口に於ける死亡と出生の數の關係が人口増加にとつて有利な方向に赴き其の差異が非常に大きくなつたと云ふ事が都市人口の増加を齎した根本的理由ではない。都市膨脹の根本的理由は寧ろ經濟的狀態の内に求めらる可きで經濟的狀態に應じて茲に人口の集中現象を見

出すのである。人口總數に對する都市人口數の割合は人口の集中現象の有無を示すのである。例ば人口總數が増加しても都市人口の總人口に對する割合は増加しない場合もあれば又は反つて減少してゐる場合もあるし反對に人口總數が左程増加してゐないのに都市人口の總人口に對する割合が非常に増加してゐる場合もある。

此の關係に於ける都市膨脹は人口の分布と云ふ問題の一部をなすもので人口分布の情況は社會經濟組織に因つて、即ち一定地域の上に出來る丈け多くの人口を支持しやうとする不斷の努力に因つて決定される。人口は其の分布に於いて出來得る限り抵抗力の少ない方向にと進んで行く従つて生産方法の變化によつて絶えず影響されてゐる。産業組織が其の能率を増加する爲めに一定地域内に労働者の存在するのを必要とする場合が生ずると労働者は其の地に見出され

る。此の吸引の方法は所謂「よりよき生活」の誘引力であつて利己心の動機に訴へる形式に現はれる。この意味で經濟的の諸勢力が都市に人口を集中せしめる最大の原因であると云ふ事が出来る。

然らば此の經濟上の諸勢力とは何んであるかと云ふと多くの人は「蒸汽力」或は「蒸汽力の求心的傾向」であるとして將來は「電氣力の遠心的性質」によつて過度の稠密な人口を分散せしめようと想像する。蒸汽力の利用及び機械の使用が人口の集中を惹起した一勢力であるのは疑いもないが機械や蒸汽力の使用されなかつたエヂプト、メディア、フェニシア、希臘、羅馬に相當に大きな都市が既に存在してゐた。故に Weber 氏に従へば「斯くの如き重大な社會現象に對する説明として人間の使用する一機械などを以つてする事は不十分な解釋であつて何人も

社會其のものを其の全體に於いて考察する事なくして社會現象の眞の關係の原因を明瞭にする事は出來ない」のである。従つて都市發展の歴史は社會發展の、更に嚴密に云へば經濟的發展の研究と相俟つて初めて理解せらるゝを得るのである。生産力の増加發達の階程を追ふて行くに其れは人口の分布、都市形成、人口の集中現象を説明する上に多大の光を投げる、即ち是等の現象に就いては經濟的説明が最も有力なる所以である。

普通に生産力の増加は協業 (co-operation) に頼る所頗る多大であると云はれてゐる。協業の基礎となる分業又は職能の専門化が生産力増加に貢獻する所あるは周知の事實である。この職能の分岐、専門化と云ふ事が従つてこゝに論ずる人口の分布殊に都市形成と云ふ事の重要な素因を作つたのである。協業は各獨立の經濟單位が

流通經濟組織によつて結合せらるゝ様になつて、又更に其の範圍を増大すると共に利益をも増進した。故に Weber 氏は「文明の歴史は單に原始的社會單位——原始家族團體、氏族、父權的家族、稍や擴大されては村落共同團體又は莊園團體——等の各單位を隔絶してゐた障害を破砕して來た事の記録と云ひうる。」此の經過中に於いて最も顯著な役割を演じたものは商人であつて商業程、孤立的社會單位の合成に與かつて力あつたものはない。都會發生の起源は斯の如くして交易の開始と云ふ事に負ふ、今日の商業的大都市は種族團體の境界の邊に設けられた原始的交換地點の後繼者であり又販路の擴大は市場中心地の膨脹を意味するものである。斯くの如くして産業社會が世界的範圍に擴張した事が人口集中の問題に密接な關係のある事は明白であらう。他方協業の基礎となる可き分業は各

個々の經濟單位の職能を専門化する事によつて或種の職能に従事する者をして土地(殊に農耕を行ふ土地)から分離せしめる事となつた。即ち一方には合成的、結合的勢力によつて經濟的交易の範圍が擴大した事と他の一方には經濟社會の各成員の職能的分化とはこゝに人口分布の情況を決定する有力な作用を爲したのである。

三

經濟社會の或る人々が他の人々と分離して土地耕作以外の仕事を專業として行ふ様になつたのは經濟發達の階程に於いて一期を劃するものである。未開の經濟社會にあつては人間慾望も極めて僅かで且つ單純であつた故に農業は一つで以つて全部の生活を包含しうる職業であつた。然し人間の慾望が増加し單に食料産物丈では満足が出来なくなると新しい慾望の満足に従事する職業は農業と分離して發生して来る。

而して生産力の増加はかゝる新しい慾望への給配を可能ならしめるが故に其の結果は社會の根本的欲求の満足に従事しなければならぬ人間の割合は漸次減少して来る結果となる。是れが農業に従事する農村人口が總人口に對する割合に於いて減少して来る理由となるのである。更に人間の慾望の世界中で麵麩や牛酪の相對的重要性が減少して來ると共に農業人口の相對的減少の原因となるのは農業を専門とする生産者が土地から收穫する一人當りの生産額が増加した事である。施肥の改良、耕作方法の學理的、機械の使用更に未開地の開發を促進する運輸機關の完備等は社會全體の食料を供給する爲めに土地に定着してゐなければならぬ人々の相對的數を非常に減じた。

是等の原因によつて土地から解放された人々の數が多數であると云ふ事が都市發達の原因を

尋ねる上に非常に重大な意義を持つて居る。蓋、都市は土地を耕作する事のない人々から成立してゐる従つて彼等が食料の供給を受けるには他に食物の餘剰生産がなければならぬ。此の事は一定數の人口を支持するのに全部の人口が土地耕作に従事しなくとも差支ない事を意味するのであつて、又、土地の豊饒或は耕作技術の進歩を前提とし其の場合にも交通運搬の方法が比較的便宜であること云ふ事を想定してゐる。ウエバア氏の云ふ所によればナイル河とユーフラタス河の流域はこの三つの條件を具備してゐたので歴史上最初の大都市であつたThebes, Memphis, Babylon, Ninevehの諸市が發生したと云はれる。古代羅馬市が其の市民の生活を維持する食料の供給を伊太利半島から充分には得る事が出来ないで他の地中海沿岸地方に仰いでゐた事は運輸方法の不備などからして往々食料

給配に困難を惹起したけれども其の最大の原因はウエバア氏によれば羅馬が經濟的發展から其の都市の大を致したのでなく従つて農産物の供給に對して正規の方法に於いて工業的産物を交易せずには等供給を以つて征服による分捕品と看做し又支配の規定による貢納として地方の支配者の手に納められたものであつた。若し羅馬市が自己の食料供給に對して拂ひ得る丈けの生産力を持つた工業的人口を保持してゐたならば運輸の困難などは確かに壓倒されてゐて其れ以上の利益を得てゐたに相違ない。交通機關の完備も必要であるが經濟的發展の正規の過程を経て生れて來た都市に於いては明かに其の都市人口の生活を容易に支持しうる力が附與せられてゐるのである而して農村と都會とを連絡する交通の便宜は寧ろかゝる關係に附隨せる現象であると考へられる。後に述べる様に交易の中心地

から發達した町又は小都市などは其の地形地勢上何づれも交通の便宜な地點を占めてゐる。

農村人口の解放中最も重要なのは土地耕作の改良であつてウェバア氏は十八世紀後半から十九世紀に入つての時代が製造業や交通設備の革命的變化の爲めに經濟學者や統計學者から其の農業的方面を見落されてこの期間内に行はれた著しき農業改良は認められずにある事を述べて「吾々は十八世紀の後半に於ける英吉利の産業革命と云ふ事は屢々耳にするけれども其れと同時に起つた農業革命(Agrarian Revolution)と云ふ事は殆ど聞かない」と云つてゐる。而してかかる耕作改良の結果は耕作されてゐる農業用地の面積と其の收穫總量とが(英國に就いて見れば)一七五〇年來非常に増加して來てゐるにも拘らず農業人口は工業人口に對して相對的減少の傾向を示してゐる。

す擴張して行くと共に商業的中心の膨脹を伴つたのである。分業或は其の更に重要な一面である協業は生産力を増加した。人口集中の現象——一般的に云へば人口の分布の情況——が生産力の増加に伴つて變化すると云ふのは此の意味に於いてある。欲望の質に於ける増加及び其の充足とは生産力の大小に關係する範圍に於いて又人口の分布の現象に關係を持つてゐる。故に人口の分布、其の集中現象は經濟社會の發展の過程を通じて説明し得らるゝのである。

従つて交易の中心として都市形成及び其の發達の歴史は社會經濟發達の變遷の説明と共に説明せらるる。交易經濟組織の有無並びに其の廣狹によるかのビュヒアー氏の經濟的發達の階段説は交易關係による經濟社會發達の分類である。丈けに交易的中心としての都市發達を説明する上に便宜である。他の經濟單位と何等組織的の

經濟社會の發達に伴ふ農村人口の比較的減少は農村に定着す可き人々を解放した事を語るものであるが然らば斯く解放された人口は何處へ落付くであらうか。之れ以下に商業的中心地の膨脹に就いて述ぶるによつて明白となるであらう。

四

時間の點から見れば農村から解放された人口を集中する事に作用した經濟的勢力は交易であつた。交易或は商業と云ふものが無ければ町も都市も存在する事は出来なかつた。蓋、都市は農村の供給する食料を購入する非農業的人口の存在を想定するからである。土地の耕作者の一部分が農業を捨て、他の産業の生産物を交換して自分等の食料を得る様になると茲に交易の基礎が置かれる、職能の専門化廣い意味で云ふ分業が行はれる事となり是れは交易の範圍を絶え

交渉のなかつた家内經濟時代を過ぎて多少の經濟的取引が各部落の間に行はれる様になつた時、如何なる場所が交易地點として撰定されたか、是れは都市所在地(city location)決定に關する問題である。歴史上の都市の所在地が或は封建領主の城塞又は宗教上の建物の附近に存在してゐたとか或は近代の都市の中には政治的理由によつて其の所在が決定されてゐるとか、又は鑛山其の他土地の富源を利用する便宜から其の近傍に都市が建設されるとか其の決定に關しては種々の理由が存在するが其の決定上に最も有力に働く要素は交通の利便であり交易しうる範圍の廣狹である。従つて内地(沿岸に對して)に在る都市の大きさは先づ其の都市を自然に貨物の集散の中心としてゐる周圍の平野の廣狹に依つて決定され、平野に於ける住民の數を決定する土地の豊沃の程度は都市の大きさを決定するもの

としては第二次的の勢力を有するに過ぎない。又貨物を運搬し分散するには交通機關の設備の必要がある故に都市の所在を決定する最も重要な要素は運輸機關の接續(Break of transportation)と云ふ事である、然し一方に交易の中心地としては此處に於て貨物の授受、所有權の移轉が行はれるので貨物の保存、移轉に諸種の機械的設備を要するのみならず是等商業取引に關する複雑な組織を發生せしめる。輸出入業者、商人、兩替人等が莫大の富を集積して之れによつて彼等の欲望を充足させる爲めに他の階級の存在を要求する事となり其の商業中心地に於ける人口の増加を急激ならしめる一因を作る。今日世界の多くの大都市が商業の中心地として勢力を持つてゐるのは都市發生の性質からして當然容易に理解し得られる所であつて人口集中の現象の根本的理由が蒸汽力の利用(殊に鐵道を云ふ)

かつたのは當然である。伊太利の諸都市の經營した外國貿易はウエバア氏の意見によれば主として奢侈品の取引であつて都市と其の周圍の農村との一年中の商業に比べれば實際に僅かなものであつたとせられてゐる。然し是等の南方伊太利の諸都市の繁榮を招致したものは恐らく此種の外國貿易によつたものであらう。

斯かる都市經濟の時代から次の國民經濟の時代への變遷の中に於いて商業の範圍は漸次に擴張されて來た。東洋の珍奇な産物や香料寶石等を載せたヴェニスの船が訪れる事は英蘭や西部歐羅巴の諸國にとつて非常な事件であつた。しかし當時の運輸の技術は輕量で耐久性があり且つ價格の高い物品でなければ取扱ふ事が出来なかつたので勢ひ奢侈品の取引に従事してゐたが商業經營の増大並びに富の増加によつて他の日常の貨物に就いても遠方の商業が行はれる様に

に存すると云ふ説明の不充分である事は明白であらう。

然し城塞、修道院、徒涉地點又は港灣の附近に發生した原始的の交換地點は若し商業階級が分業によつて生じた他の産業を其處へ引き寄せなかつたならば永い開單なる市場マーケットに止まつてゐたであらう。併し農業から分離した工業上の技術を持つた職人は雖て一定の地點に定住し自から設けた仕事場兼店舗で作品を販賣する事の利益を知つて小規模の資本を持つて町タウン或は市場マーケットに定住する事となり歐羅巴の中世に於いてみる自由工匠の發達を見るに到つた。中世都市の特色に就いて語る事は本稿の直接の目的に大した關係はない故に次の事を言及するに止まる、即ち商業がかくして小規模な工業經營の集つた都會と其の周圍の農村の間に限られてゐる時代には商業的中心が大きな地域を占めるに到らな

なつて最早、人々の大多數が使用する貨物は其の消費される場所の近くで生産されたものであると云ふ事は事實でなくなつてしまつた。漸次に産業の地方的分化が行はれる様になつて來て一週間に一度行はれる市マーケットは全く其の地方丈け生産物を販賣したものであつたが其れも一年中開かれてゐる大規模の市場となり他の都市、農村の生産物を諸方から集める事となつた。

かゝる經濟社會の漸進的擴大が都市の發達に及ぼした影響は明白すぎる程である。EssexやMiddlesexの農作者の地方的市場に過ぎなかつたロンドンと世界の金融上商業上の中心地となつたロンドンとの間にどんな相異が存するかは説明を待たぬ所である。

ウエバア氏によれば都市の人口を集中せしめる有力な原因の一つは商業であつて此の事實は製造工業の盛んにして又人口稠密の極めて大き

い白耳義と商業國である和蘭とを比較してみる。と其の都市人口の割合では和蘭の方に高度の都市人口率が認められる事によつて例證されてゐる。製造工業の中心地が其の増加の最高率に達したのは蒸汽力が固定された機械に適用された時に於いて、あつた。

要するに職能の分化が精細になつて行くに連れて其組織體全體の結合を充分に保つには各分岐を連絡する分散的系統(distributive system)の精巧となつて行く必要がある。従つて分布的系統の微妙なる運用を司る中樞は非常に集中的傾向を採るのである。之れが商業的方面から觀察した都市人口の集中に對する説明である。

五

以上述べて來た様な經濟社會の發展は工業經營の方面に如何なる關係を保つて來たであらうか。茲にも市場の擴大と云ふ事が工業上の企業

經營に於いて集中現象を齎し人口の別の部分を工業都市或は又偶然にも商業都市の中に集中せしめる事となつた。

經濟社會の發達と共に企業經營の形體の變遷が論せられる。自足自給の經濟生活が破れて交易經濟が始まると共に工業上の技術者は農業から獨立したがかく分立した經濟關係は商業によつて結合される事となつた。工業經營の形式は之れから手工業組織、家内工業組織、工場工業組織へと推移して行つた。工場工業の組織は市場の漸進的擴張によつて可能となり其の勝利は十八世紀に於ける動力機械の發明、十九世紀に於ける運輸交通の近代的組織の發達によつて確立された。この新しい企業經營の形體が漸次勢力を占めて來た時に於いて其の前から存在してゐた古い形體の企業經營に加へられた壓迫は誠に悲惨なものであつた。所謂片手間に農作に従事

して居た職人が其の生活を失つて純粹の工業労働者として新しく成立した工場に雇傭されて行くに至つた點は不充ながら本誌第十五卷第八號の拙稿「十九世紀初期に於ける英國都市生活の一面」に略記して置いた。新しい農業經營法の爲めに壓倒された農夫と共に半農的職人も今は田舎の村落や小都會を離れて澤山の工場の集つて出來た新しい工業都市か或は従來の商業都市で以つて新しく工業的活動を始める様になつた都市へと殺到した。之れは明かに又人口の都市集中の一因であるが、茲では大規模工業の經營の利害を云々せず今日今日の企業經營の組織である工場工業組織は人口の分布に對して如何なる影響を與へるかを觀察するに止める。

既に述べた様に工業經營の發達は一方に農作者の生活を襲ひ他方に手工業的經營法による職人を壓迫して共に彼等を地方の村落から追放し

た。其の結果は人口の分布の上に集中的現象となつて現はれるが其が商業の場合の様に大都市の發達を促すか其れとも小都市小都會の發生と云ふ事にあるかは疑問である。がこの問題は大规模生産を行ふ工場の所在地の決定の問題であつて交通運輸の地方的便益と云ふ事が他の自然の與へる利益よりも重要な地位を占める場合には工場は大都市へ赴くであらうし反對に生産に就いての地方的利便が工場の地位を決定するとすれば工場は恐らく小都會に出來る事となるであらう。即ち生産上の便益によるか或は生産物の處分の上の便益に支配されるかによつて其の工場の所在地が決定するのである。

是等の關係に就いて歴史的に見ると分業が發達せずして經濟生活の地域も狭い時代には孤立的經濟又は都市經濟時代の大部分に於いて見る様に工業は消費者の所在に接して行はれてゐ

た。生産に對する自然の有する利益は全く無視されてゐたが、事實又此自然の利益を充分に利用すると云ふ事が分業の發生を促す動機であつた。分業が行はれて交易の組織が改良せられて來ると又生産の條件が變化して來る。即ち農業、鑛業、其他粗製工業にあつては交通機關の改良は一地方の有つてゐる各獨特の自然的利益を増加しその重要さを増す。かくて是等の企業經營に在りては自然の有する富源を出来るだけ利用しやうと試みる事から交通組織が整頓すれば或る程度まで農業及び鑛業上の人口は分散する。

然し土地の有する特別の性質に重きを置かない製造工業にあつては事情は著しく是れと異なる。かゝる工業方面にあつては土地についての直接の要素は生産に於ける原料品丈けであつて他の要素例へば資本、勞働、地代、諸租税、精製品の販路、運搬の便宜等が重大な關係を持つて來

るが故に工場を惹起し茲に大都市は驚く可き比率で膨脹するであらう。河流の利用、原料産地に近いと云ふ事の意義が失はれると一般的の傾向として商業の中心地が工業の中心となつてしまつたのである。

六

然し最近の傾向としては斯の如き工業經營の集中も其の限界に達したものと如く、是等の工業經營が工場を大都市の郊外に建て、一方高い都市の地代を逃れると共に都市の有する貨物の運搬上の便宜を得んと企て茲に分散的反動が生じた。郊外に於ける工場經營は十九世紀末から合衆國、英吉利、獨逸に於いて漸く顯著な現象となつて現はれ、充溢した都市の貧困と窮迫とに心を悩ます社會的博愛論者に光明を興へる事となつたのである。

此の傾向に與かつて力ある者は前にも述べた

る。殊の地方的に交通組織の改良の結果は原料品の價格を低廉にしたので此の點に就いて生産の要素としての地方的土地の位置の相對的意義は減少したのである。故に鐵道が形體の巨大な又重量の多い貨物の運送に關して運搬經費を低廉にした事は一地方の自然的利益の意義を減じて生産に對する非自然的又は人爲的の利益の意義を増した。精巧品の生産に就いてみれば生産上の他の要件か或は消費に關する條件、即ち販賣の便宜、消費者へ給配する經費の低廉と云ふ事が工業經營の所在地を決定する事となる。若し消費者に近いと云ふ事が此の場合最も主要な要件であれば、商業の中心地は富裕なる消費者と其の數が非常に多いし又他の地方の消費者階級に貨物を給配するにも充分な便宜が備つてゐる故に大商業の中心地が又製造工業の中心地となり、各個の工場は争つてこの有利な地點に集

都市地代の昇騰も其の一つであるが上記諸國の鐵道政策殊に運賃に關する規定が生産に於ける特殊の土地の意義を減じたと同様に精製品の分散に於ても其要素としての意義を減じたのによる者である。従つて將來運賃の均一が實行される様になると又都市が小都會よりも生産物を低廉に給配しうると云ふ利益は消失してしまふ。

更に生産上の他の要件の就いて見れば殆ど製造工業が商業の中心地に集中する利益は認められない。以前は販賣、購入の仕事、資本、信用を得るの便宜は商業の中心地に於いて爲されなければならなかつたので工場まで是等中心地に設けたけれ共も今日になつてみれば是等の事務は市中の中央に設けられた事務所で處理されるからして都市の中央に工場を置かなければならぬ理由は毫も存在しない。

一方小都會の與ふる利益は其處に於ける地

代、租税の低廉なる事又往々にしてかゝる小都會が其の發展の爲めに種々の利権を與へる事等がある。勞力の供給に就いての都市と地方の利害は其の仕事の性質にも依るが、熟練職工の賃銀の場合は都市に於いては勞働團體が非常に勢力を振つてゐる故に其の賃銀は地方よりも都市の方が高く、又賃銀は同額としても雇主は都市の勞働組合の種々なる掣肘を逃れる爲めに都市を去る傾向がある。併しかゝる點に於いての地方の利益は要するに一時的の現象に止まりはしまいか。

不熟練勞働に就いて見ると上記の關係は反對となる。大都市は無教育にして技能の無い、貧窮に悩まされてゐる人口を多數に包含してゐる。彼等は團體を組織する事が出来ないので starvation wage でもそれを支拂ふ者があれば勞力を提供する。従つて大都市では地代及び生活

の必需品が共に農村地方より遙かに高價であるにも拘らず sweat-shop を經營する者は低廉なる都市勞働者により従順であり且つ利益多い點を認めてゐる。

要するに賃銀の低廉にして不熟練勞働を使用しうる場合以外には全體として大都市に於ける製造工業は不利益を立場にあると云ふ事が出来る。今日斯くの如き事情では大都市内に工場を經營する理由は (一) 以前に郊外に建てた工場が都市の膨脹と共に都市の内部に入込んでしまひ未だ移轉するに利益なき場合か (二) 初めに建てられた場所以外では未だ見出す事の出来ない様な傳統的の熟練勞働を必要とするか或は技術の非常に高度の發達を必要とする工業 (三) 其の製品が主として其の地方の消費に供給せらるゝもの (四) 使用する原料が陸路並びに水上航

路の二方面から均しく得られる場合等の四個の理由に基くのである。

然し乍ら茲に注意を要するのは斯くの如く大都市から分散した工業經營は到る所の田舎に一、二の大規模な工場を備へた工業村落を形成せずには臆て小都會 (a large town) を作るに至ると云ふ事である。

何故に一、二の大規模な工場の存在が工業的村落を形成するに止まらずして小都會を發生せしむるに至るか云ふと、大規模に組織された工場には其れ自體で數千數百の勞働者に仕事を與へてゐると共に又他方には當該工業に、關係のある他の工業が經營上の便宜からその工場の附近に集合する事となる。更に當工業上の副産物の利用が別の工場の存在を促す事あると共に男工又は女工の何れか一方の勞働丈けを必要とする工業の經營せられてゐる傍には反對の性の

勞働者を使用しうる便宜からして彼等を收容する他の工業が発生する、例へば鑛業、機械製造業等男工を使用してゐる小都會に彼等の妻や娘を收容する紡績工場が設けられると云ふ様な場合である。又全然新しい周圍に工業經營を創めるよりも同種工業が既に行はれてゐる場所の近處に工場を設ける方が容易であると云ふ傾向等が工業村落を多少大きな町は小都會に發達させる理由である。

七

以上述べた所によつて經濟社會の發展と共に如何に人口の分布が影響されて來るか云ふ事を稍明かにし得たと思ふ。人口の集中現象は單に工業上に巨大の機械が使用された爲めとか交通機關の設備が交通の便宜を可能にならしめた爲めとかに解するのは不充分である。農業と人口集中の現象との關係に於いて述べた様に其の

根本的原因是生産力の増加による人口の土地解放に基くものであり其が商業の中心又は工業の中心地に集中せられるのは生産力の増加に貢献して來た營利經濟組織に於ける必然的の傾向と思はれる。故に輓近我國で盛んに田園都市の名の下に誤り唱へられてゐる様な田園住宅の計畫は兎に角、完全な都市の形體を備へた田園都市の計畫は其の理想的方面から見れば——實際的の妥協的方面は暫く避けて——其の成功は覺束ぬものご考へられはしまいか。簡單な例を以つて示せば商業の中心地や工業の中心地を田園化する事は果して現在の經濟組織で可能であらうか。工業經營者の責任又は目的は決して田園的生活を労働者に與へる事ではない。此の點に於いて田園都市の主張はどの位其の理想とする方面に進出しうるか又何づれの邊で妥協に終るかは興味ある問題として殘る。

兎も角も人口が農村に於いては比較的に散在してゐるのに對して他方に狭い一地域内に密集する現象の存在する理由は生産力の發達の説明と相俟つて明かにせられた。ホブソン氏(J. A. Hobson)の云ふ通り産業組織上の革命は異常な天才の發明的の頭腦から生れ出た發明の爲めに惹起されるものではない。多くの人々の心を其の時代に於ける中心問題であつた、如何にして生産力を増加す可きかと云ふ問題に向ける産業上の事情の壓迫が存在してゐたに基くものである。都市人口の集中現象もかゝる見解の下に解釋されなければならぬ。たゞ生産方法の個々の具體的の事情が第二次的に人口の分布に作用を及すのは否定する事が出來ない。其の意味に於いて人口の分布の現象に對して「蒸汽力の求心的性質」とか「電氣力の遠心的性質」とか云ふ事は許されうる。

將來に關する諸産業の發達と人口分布との關係は全く豫測を許さないがウェバア氏は産業の性質を四個に分類して其の性質に従つて多少の推論を下してゐる。今少しく其れを紹介して筆を措かう。

ウェバア氏に従へば人類の産業は便宜上四つに分類する事が出來る、即ち農業、鑛業と包含する extractive industries と、各種の商業、運輸交通其他凡への交換の媒介組織を總括する給配的産業(distributive industries)や、製造工業と、家庭勤務者、政府官吏、自由職業者、學究等を一括する勤務並びに自由所得を得る職業の四種である。

此の中第一の農業鑛業等は益々交通機關の擴張改良と共に分散的になつて行く傾向はあるが第二の給配的産業は交通機關が發達して其の取引範圍が擴大すればする程集中的傾向を増大し

て商業中心地の膨脹を惹起するであらうし又生産物の増加はこの膨脹にとつて最も重要な關係にある。第三の製造工業は同じく集中の傾向を示し從來は商業の中心と一致して大都市の發生を促したが近來幾分か分散的傾向のある事は既に述べた通りである。が其の分散的傾向はたゞ從來の商業中心地と分離した丈の事であつて其れ自體は依然大規模生産による利益を主眼としてゐて、交通組織の改良、市場の擴張も此の關係に於いて行はれるものであるが故に村落手工の時代或は其れに類似した企業形體に復歸するに非ざれば集中的現象を妨げるものではない。最後の勤務提供者に就いては彼等が勤務を提供する場所は前三者の何づれにか附随するものであるから其の何づれに附くかによつて決定されるが大體に於いて彼等の勤務を受納する者の近くに存在しなければならぬと云ふ事は人

口の多い所と富の豊富なる所に集中せしめる。従つて大體の傾向に於いて商業の中心地に集ると云ひうるであらう。

かくて近代的形式による一國の充分なる産業組織は農業を除いた他の諸産業に於いては何づれも人口の集中を要求してゐる。然るに農業が既に述べた様に全人口を支持するのに必要とする人口数は近來總人口に對して益々減少の割合を保つてゐる故に之れも亦人々の集中地點に於ける比率を増加させてゐる事に歸着する。是れが「都會への流れ」(The Drift to the Cities)と云ふ日用語で知られた傾向の簡單な學理的の説明である。「農村へ歸れ」の運動(Back to the Land)は是等の情況に於いては發生しうる見込がない。其の傾向の現はれうる可能性は唯一つある、其れは云ふ迄もなく農業上に收穫遞減の法則が顯著なる作用を始め出した時に於いてい

る。農業上に投せられた莫大なる資本の力が農業労働者の(相對的)解放を行ふ事が出來ず、一人當りの生産額が減少しはじめ又人口は依然増加する傾向を示すと云ふ場合に立ち至ると「農村復歸」の傾向が初めて生ずるであらう。

以上述べた所によつて近き將來に於いては依然集中的運動の繼續を見るであらう。斯くて其の豫想的傾向が周圍の郊外を包含する大都市の農村に於ける餘剰人口吸收と云ふ方面に現はれた場合都市問題や都市計畫の意義は増すであらうし、分散的傾向に期待を懐かんとする現代都市生活の呪咀者は益々反抗の聲を大きくするであらう。「田園都市論」の著者であるA. R. Sennett氏は人口の集中は人間生活を不自然な状態の中に置いたが其の傾向が必然であるとすれば此の勢力と妥協するの外はない、田園都市は誠に此の妥協に過ぎないと述べてゐる。吾々は妥協が

理想論者の屈服であるならばかゝる田園都市が出來たとしても其の目的が反對の立場にある必然の勢力の爲めに壓迫されてしまつて、期する所の目的の破滅に陥りはしないかと云ふ事を危ぶむ者である。此の點の研究は他日に譲る。茲では所謂人口集中の「必然的」傾向に就いて考察を下した丈けである。

(大正十一年六月十四日稿)

労働管理問題一斑(一)

園 乾 治

現代の産業の歴史は、徒費(Waste)を防ぐための戦争の歴史、詳しく言へば、生産過程に於ける労働の節約と、原料を完全に利用するための

戦争の歴史である。さうしてこれ等の目的を成就しやうとする争闘は、小企業より大企業への移推を惹起し、少數の労働者を有する小工場所有者は、大工場に於いて多くの労働者を有する會社のために壓倒せらるゝ結果となつた。そのために労働及び資本を一經營の下に集中し、生命のない生産機械は完成せられ、注意せられるやうになり、それに反して、生命を有する労働者は、最近に至るまで一顧をも與へられず、等閑にせられたのである。また經營の集中は分業を可能ならしめ、生産過程を區分したために、漸次労働者の作業は簡單になり、機械的になつて、漸次熟練の必要を少くし、労働者は個性を失ひ、單に機械の補助をなすに止つて、少年及び婦人も工場労働に従事し得るやうなつたので、労働者は容易に求めることが出來、一端失つた場合にも容易に補充することが出來、殆んど注意